# 令和３年度自己評価結果公表シート　　玉川学園幼稚園

１.本園の教育目標

Ⅰ.子どもの心を育てること

心とはその人そのもの、あるいはその人の基本的な感性である。心が育つということは、自分を持つということである。幼稚園では、幼児にふさわしい環境と指導を通して、人間として望ましい感性や価値観を育て、幼いながらも自分自身を築くことで、今後その子が生きていく上での礎としたい。

Ⅱ.よい仲間社会を育てること

幼稚園教育は集団生活を通して行うものである。子ども一人一人が集団生活のルールをわきまえながらも、自己を素直に表現することができる、幼いながらも自立した仲間社会を育てることで、社会道徳を身につけさせたい。

２.今年度の重点目標

Ⅰ　感染症予防のために十分な対策を講じる
Ⅱ　感染症対策と保育の充実の両立を図る
Ⅲ　週案等の保育計画を継続して作成し、有効に活用する

３．重点目標の取組状況

| 項　目 | 取組状況と評価 |
|---|---|
| 感染症予防のために十分な対策を講じる | ① 取組状況<br>２度にわたる緊急事態宣言の発出、デルタ株やオミクロン株の出現など、今年度も新型コロナの感染対策に追われた。基本的な感染対策として、園内の消毒や園児の体温測定やマスク着用、保育室等の２方向換気を徹底した。また、各種行事も分散形式で実施した。幼児にも感染しやすいオミクロン株の特性を踏まえ、園内での感染拡大を防ぐため、１月から３月にかけて学級閉鎖を早めに実施した。さらに、３学期は行事の縮小、分散を強化したため、保護者の協力を一層求めることになった。<br>② 保護者アンケートの結果<br>「コロナ禍での園運営について」という設問に「大いに信頼できる」「概ね信頼できる」の合計が８３.６％であり、感染状況に応じて臨機応変の対応であったが、保護者の理解が概ね得られているといえる。<br>③ 教員の自己評価の結果<br>基本的な感染対策については昨年度から継続して行っている。自己評価では、個々の教員が意識して対策を心掛けたとしており、変異株が出現するたびに、教員が協力して対策にあたった。 |

| | |
|---|---|
| 感染症対策と保育の充実の両立を図る | ① 取組状況<br>　感染対策と教育活動の両立は、コロナ禍が始まって以来の課題である。コロナ禍にあっても、本園の教育方針に沿って日々の保育を進めるよう心掛け、園内研究会を通して教員の資質向上に努めた。参観日や発表会、運動会等も、緊急事態宣言の合間を縫って実施し、保護者に子どもの育ちを理解していただく機会とした。ただし、３学期はオミクロン株対策として、発表会等の行事が縮小、変更を余儀なくされた。<br>② 保護者アンケートの結果<br>　「コロナ禍での教育成果」について「大いに満足」と「概ね満足」の合計が９１.２％であり、難しい環境の中での教育成果について概ね理解が得られているものと言える。<br>③ 教員の自己評価の結果<br>　感染予防と教育活動の両立は困難で、今年度も様々な制限を受けながら日々の保育や行事を行った。一年の中でも感染状況に波があったため、自己評価では、十分に両立できたとは言えないという評価になった。 |
| 週案等の保育計画を継続して作成し、有効に活用する | ① 取組状況<br>　保育現場において、保育計画をきちんと立てて、保育を進めることは重要である。コロナ禍のような見通しが立ちにくい状況にあっては、その時々に応じて計画を立て、望ましい成果が上がるように努めることが重要であるため、PDCA を通じて日々の保育内容の向上に努めた。<br>② 教員の自己評価の結果<br>　必ずしも保育計画を十分に有効に活用できたという評価には至っていないが、日々変化する感染状況等に応じて、その都度見通しを持って保育を進めることに寄与した。 |

４．学校関係者の評価

| |
|---|
| 　玉川学園幼稚園では、コロナ禍においても教職員が一人一人の子どもに丁寧に接しており安心できた。保護者も基本的には幼稚園に対して好意的である。ただし、コロナ禍により、保護者が幼稚園での子どもの様子を見る機会が減っていることを踏まえ、ホームページ等による情報発信の更なる充実が望まれる。様々な行事が分散形式で行われたが、メリットとデメリットがあるのでそれを検討して今後に活かせていただきたい。また、デジタル化が進む昨今であるので、良いものは取り入れて改善を進めてもらいたい。 |

５．財務状況

| |
|---|
| 　公認会計士による監査において、当法人の計算書類は適正に表示されているものと認められている。 |